

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八二八
弊NPOは「憲法を改正、経済力と軍事力の両足で健全な国体を支える国家」を求めます。

《日本人の誇り、辻本憲三さんのナパ・ワイナリー》

ワイナリーオーナー辻本憲三さんが自らワイナリーを営むことを決意したのが1990年代。以来、ケンゾーエステイトのワイナリーがナパ・ヴァレーに完成するまで実に20年もの歳月が費やされたのです。そしてその歴史もまたワインと同様ドラマチックなものでした。私はケンゾーエステイト祇園店開店当初、安井さんにご案内戴いてからケンゾー鈴蘭(りんどう)ワインに惚れこみ、時折お伺い、パリやハワイ、クルーゼンゲの船内、当然国内のホテルで必ずケンゾー鈴蘭ワインを指名しています。たまには贅沢!そんな時は藍や紫を戴きます。私の誕生日の翌日ケンゾーエステイト祇園店でワイナリー完成十周年記念パーティが20名余にて開催されました。辻本憲三さんと夏子奥様がお迎えされ、おもてなしをされました。

京都市セラ美術館 新館東山キユーブ 9月19日~21年1月3日 《アンディ・ウオーホル・キョウト》

新型コロナウイルス感染症の予防拡散防止のため、休館している場合があります。

本展はポップ・アートを代表するアーティストであるアンディ・ウオーホル(1928~87)の京都初となる大回顧展です。彼は商業デザイナーからキャリアをスタートさせ、30代でアーティストとして本格的に制作を開始。初期にはアクリル絵具でキャンバスに描く手法をとっていましたが60年代以降は「ファクトリー」と呼ばれるアトリエをニューヨークに設立しシルクスクリーンを多用した作品を次々と発表。「キャンベル・スープ缶」や「マリリン・モンロー」など当時広く知られていたモチーフを取り入れ、その影響はいまなお絶大です。約2000点の出品作品のうち半数以上が日本初公開作品で占められるというこれまでにない展覧会です。

私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

《阿呆船上巻 / S.ブランド著》

十五世紀末、近世ドイツ最高の風刺詩人と謳われたセバステイアン・ブランドは教会の腐敗や人々の強欲や無作法を戒め、知恵や理性を教えるため「阿呆船」を著した。そこには112種類もの「阿呆」が「阿呆船」に乗り込み「阿呆の国」を目指す姿が描かれている。刊行後は各言語に翻訳され大ベストセラーとなった。魅力的な挿絵の多くは若き日のアルブレヒト・デューラーが担当した。

さてそのドイツであるが先日新型コロナウイルスによる経済への打撃を緩和するため、消費税の引き下げを決定した。日本とドイツでは財政収支が全く違うため単純な比較は出来ないがコロナ禍の収束後は日本経済の立て直しには消費減税が有効であろう。ここに来て大盤振舞いの日本政府だが手続き業務が特定の民間企業に委託され問題になっている。政治家・官僚・一部企業による癒着を疑う者は「阿呆」なのか? 「賢者」なのか?

土口哲光和尚の説法

《この苦しみを越えて》

外出を減らして要請された自粛で、人と人との間の社会的距離を保つようにしてコロナ禍を避けている。果たしてコロナは終息するのだろうか? との不安を抱き、長期に亘る辛抱も覚悟しての日々の暮らしが続いている。

人は生まれながら必ず「四苦八苦」の苦しみを背負う。八苦のうち「怨憎会苦」という苦しみがあ。これは「愛別離苦」、愛する者と別れなければならぬ。苦しみの逆で、憎しみを覚える者と出会わねばならぬ。苦しみである。まさにコロナとの出会いは怨憎会苦の最たるものである。こちら側から集団免疫(力)をつけてコロナと折り合いをつける。憎いヤツでも「いいところもあるやないか」と認識の変わる日が来たらんことを!

季節の家庭料理 田村 真紀

《八月 モロヘイヤとトマトのスープ》

モロヘイヤは非常に栄養価が高く、活性酸素を抑えるβカロテンをはじめビタミンA・C・E、ミネラル、カルシウム、食物繊維も豊富に含まれます。〈作り方・四人分〉

モロヘイヤ百グラム・トマト一個・玉ねぎ半個(みじん切り)にんにくひとかけ(みじん切り)・バター大匙二・水八百ミリリットル・顆粒コンソメ大匙一半

モロヘイヤの葉を熱湯でさっと塩茹でし、細かく刻む。トマトは湯むきして粗みじんにする。鍋にバターと玉ねぎを入れ、焦げないようにじっくり炒める。水とコンソメを加え煮立ったらさらに三分ほど煮る。モロヘイヤとトマトを加え、(モロヘイヤは長く煮込むと黒ずむので)さつと煮る。

つれづれの記 山崎 辰巳

《実業家としての品性》

「ホンダ」の名で知られる本田技研工業の創業者、本田宗一郎氏が残した言葉。

「私は交通機関に関わる仕事をし、そこで生かされてきた人間だ。自分の葬式によつて、ただでさえ混雑しがちな道路をよけいに渋滞させたりはしたくない。僕が死んだら形式的なことはやめて灰は太平洋に撒いてくれりゃいいよ。いい人生だったなと自分で納得し、いい奴だったなと人も認めてくれたらそれでいいのだ」と。

遺言通り社葬や告別式は行われず、ホンダ本社や各地の事業所で、油にまみれた本田氏の写真や記念の品、絵画などを展示した従業員手づくりの「お別れの会」の場が設けられ、誰もが自由に自分の都合がよい時間に別れを告げることができた、という。今も存命なら、この時代にどんな警鐘を發したか興味深い。